

私は帯広市で生まれ育ち、その後、都会にあこがれ札幌へ出向き、ダム関係のコンサルタント業務をほんのわずか経験したのち北海道庁に入庁し、現在は函館建設管理部に勤務しています。

この間、道央・道南・道北の日本海、道東のオホーツク海、道南の太平洋と周り、漁港の整備など専ら海洋土木関係の業務に携わってきました。

入庁当時は、内陸で育ったこともあり、海の生物多様性とそのポテンシャルの高さに驚き、また、海洋土木技術の困難さを実感しました。それからは、地元漁業者との対話などから漁港整備に関する意見（苦情？）に耳を傾け、その都度、各々の気象・海象現象を捉えた新たな解析モデルや設計法の導入を追従しているうち、いつの日か知識が染みつき、結果として現在に至りました。～（技術士の取得）

海洋土木技術は、コンピュータ等の発展から急速に高度化が図られていますが、私はその技術に十分に追いついていないのが実態であり、今後もスキルアップが必要であると感じております。また、そうした技術や理念を実務に反映しつつ、併せて、技術者の育成にも努める必要があると考えています。

今後も、昨今の社会事情・情勢から産業基盤・社会基盤整備に求められるニーズが多様化・高度化しているなか、それを確実に遂行する期待度も高まっていることを認識しつつ、引き続き地域の安定・安心の確保のために貢献していきたいと思っています。

野坂弥寿二（のざか やすじ）

●水産部門（水産土木）

勤務先

北海道渡島総合振興局
函館建設管理部八雲出張所



➡ 次号は、近井泰秀さん（水産部門）

現在、土木技術者の私が「土木」と出会ったのは、小学生の頃です。母親の実家近くにある鷹泊ダムに遊びに行き、当時、近くで大きな構造物を見たことがなかったため、ダムの規模の大きさに感動し、「こんな構造物を自分でもつくってみたい！」と思い、土木の道へ進むため、大学で土木工学を学び、迷わず現在の会社を選択しました。

現在の社会では、このような大規模構造物をはじめとする社会資本が整備され、人々が当たり前のように社会資本の恩恵を受けて暮らしている中、私の幼少時代のような感動を覚える子供達も少なくなっているように感じられます。自分の小学生時代は、プラモデル作りに夢中でしたが、我が小学5年生の息子のように、「モノづくり」にあまり関心が無く、ゲームに夢中になっている子が多いように思います。近年、「理科離れ」の子供達が多く見受けられ、技術者の卵が減少してしまうのではないかと不安を感じます。だからこそ「モノづくり」の楽しさや難しさを伝えて、子供たちに関心を持ってもらい、未来の技術者を増やす必要があると感じています。近年、公共事業が減少していますが、北海道では社会資本を必要とする地域もまだまだ多く見られます。また、団塊の世代の人々が退職し、技術者の数が急激に減少しています。そのため、まだまだ多くの技術者を必要としており、私は、もっと経験を積んで、これからの若いひと達に技術を伝承できるようなエンジニアになれるよう日々努力していきたいと思っています。

本田 周作（ほんだ しゅうさく）

●建設部門（土質及び基礎）

勤務先

株式会社 ドーコン
e-mail : sh1315@docon.jp



➡ 次号は、三田村大松さん（建設部門）